

まえがき

このミュージカルは、田中幸次郎著『銚子娘道成寺』を底本として書かれている。田中幸次郎氏は安珍清姫の道成寺伝説とそこから生まれた作品は、銚子に伝わる延命姫と陰陽師・安倍清明の悲恋伝説の影響を受けて作られたのではないかとという自説を持っていた。銚子に伝わる伝承を「銚子娘道成寺」と命名し、両者を対比しつつその成立の過程や歴史的・地理学的・環境学的検証を重ねた。

この本は学問的な記述部分と、創作的な部分が交錯するおもしろい著作作品である。筆者は銚子という土地が好きであったから、田中氏がこまめに歩いて検証した銚子道成寺のフィールド・スタディに心を動かされ、芝居の本を書こうと思った。そしてできれば、「銚子娘道成寺」の出演者が女性一人である音楽劇にしたいと考えた。

幸いにも、紀州の日高川に比定される、銚子市と旭市を隔てる磯見川の河口で上演することができた。磯見川が太平洋に流れこむ荘重な地は通漣坊または通漣坊と呼ばれ、屏風ヶ浦が鋭利な刃物で切って取られたような景色を呈していた。

通漣坊前の土地の使用を所有者の高石氏に相談したところ、快諾していただいた。さらにトラックやジープの提供、特別給電用の電線の取り付け、照明と音響のブースの構築と莫大な支援を頂いた。舞台は磯見川が海にそそぐ突端の直径約一〇メートルのアリーナにした。何日かかけて整地し、舞台の上に海岸から運んできた砂を敷いた。砂は照明に映えて美しく、かつ神々しい雰囲気をもたらした。

上演したのは、七八年七月二〇日であった。

銚子は、利根川が太平洋にそそぐ川に沿って開けた町である。川口には犬吠崎という台地が三味線のぼちに似た形で突き出ている。犬吠の磯を洗う荒波の底には、複雑な根が横たわり、魚たちの格好の住処となっているという。

利根川が海と接する突端は一の島、そこからばちの先端部分を左から右に沿って黒生、

海鹿島、犬吠、長崎と続く。長崎鼻を九〇度回り込むと外川、犬若、名洗と三つの漁港が短い間隔で連なり、ここを過ぎると海岸線は次の難所へと向かう。名洗から飯岡漁港東端の刑部岬（竜王崎）まで、第三紀層の壁が波に対峙して一步も譲らず、海と陸の戦を思わせる。

その形状から「屏風ヶ浦」と呼ばれ、日本のドーバーとも称される。海岸線は三〇から六〇メートルの切り立った断崖で形成され、延々一三キロに及ぶ。

後書きとして、田中幸次郎氏が『銚子娘道成寺』の付録に載せている延命姫にゆかりのある地名とジオヒストリーを要約して転記した。フィールド・リサーチのレポートとして私は関心を持ったし、評価している。ぜひお読みいただきたい。

ミュージカル『銚子娘道成寺』の初演のスタッフとキャストは次の通りである。

スタッフ

台本・作詞・演出 小林 志郎（鬼島 志郎）

作曲 みよし てつ

振付 堀内 完

美術 碓山 喬康

照明 室屋 武

音響効果 高橋 嘉市

音楽監督 城 英輔

コーディネーター 大木 靖

制作 野村 信次
記録 堀 敬生
キャスト
延命姫 宮川 福子
漁師 田村 弘二他

野村 信次
堀 敬生
宮川 福子
田村 弘二他

第一景 プロローグ

時、平安時代、西暦九八〇年頃。

場所、下総国海上郡垣根の長者・根本右兵衛義貞の邸と海上郡横根上永井の磯見川

河口・通漣坊(洞)

登場人物 延命姫

少女のコーラス

銚子大漁節を歌う大人のコーラス

後見など

光が通漣坊の沖の荒波をなめると、一艘の漁船が波間に浮かび上がる。船の上に一人の女性が立っている。白い、無表情に近いマスクをつけている。竜の衣装を着た若い女性だ。波の音がいや増すと、びゅびゅと高鳴る風音が聞こえてくる。やがて彼女の体が三つに分割する。

ダイナミックな波音の中から、M1のイントロが湧きでてくる。

M1 「昔、女ありけり」

いまはむかしの物語

坂東太郎のながれ着く

魚うおと潮の香にみちる

銚子は国のとつぱずれ

夫婦鼻 めとぼな 黒生 くろぼえ 霧ヶ浜

犬吠 いぬわか 犬若 いぬわか 名洗 なあらい に
つづく地なる 屏風ヶ浦

じつとり暑い夏の日に
京のおとこに恋をした

延命姫 えんめいひめ は 蛇 へび になつた

いまはむかしの物語

延命姫は 二十六

顔にあざの花模様

銚子は国のとつぱずれ

夫婦鼻 めとぼな 黒生 くろぼえ 霧ヶ浜

犬吠 いぬわか 犬若 いぬわか 名洗 なあらい に

つづく地なる 屏風ヶ浦

まつくら闇の夏の夜に

乳母の手引きで夜ばいした

延命姫は 蛇 へび になつた

銚子の海は てんでん てんでん しのぎ

姫の恋も てんでん しのぎ

九十九里の潮騒が

絶えぬかぎりに語りつぐ

潮と風の鎮魂歌

ああ 銚子娘道成寺

三人の童女は、雲に乗って闇に消える。照明が消えて暗くなる。

第二景 延命姫が入水した通漣坊と姫の生家（垣根の長者・根本右兵衛義貞の邸）

M 2 「ひな流し」

横笛が奏でる「ひな流し」がきこえてくると、少女たちは、櫓をこぐふりをしながら歌う。はげしい雷の音が「からから」と天空に鳴りわたる。少女たちは逃げさる。

春の海 ゆるり

ひな流し

白木のお舟で

流しましよ

おともは 今日も

すくなひこなのみことさま

すくなひこなのみことさま

M 3 「花摘みや」

花摘みや 朝のうち

だれも気付かぬ 朝のうち

花摘みや

花つゆきえぬ 朝のうち

花摘みや 朝のうち

親方起きぬ 朝のうち

花摘みや

親船帰らぬ 朝のうち

花摘みや どこ行つた

ぐずで のろまの お花どん

田んぼのあぜ道 豆の花

ちよつと間引こか

里子にだそか

それとも それとも

女衞に売りましたよか

それがいやなら

背中のかごで

利根の深みへ流そうか

花子 よい子だ 泣かずにねむれ

花子 よい子だ ねんねしな

延命姫

南無竜神権現、南無竜神様。わが身を人身御供にささげまするゆえ、後生あらば、わたくしを南の海のさいはてまで、流させたまえ。

お父さま、姫の親不孝の罪を、なにとぞなにとぞ、お許しください。お母さま、姫はまもなく、おそばへ参ります。まだ顔見ぬお母さまとお会いできるのを楽しみにしております。でも、きっと、お母さまは、死を急ぐ姫をお叱りになられるでしょうね。

お父さま、姫の二十五年間って、何だったのでしょうか。姫の生きがいとは何だったのでしょうか。二十六歳の今日まで、男手ひとつで育ててくださったお父さま、姫はお礼の申し上げようもありません。先立つ私は本当に悪い娘です。そうです、今、死のうとしているのはお父さまの延命姫ではなく、一人のあわれな女なのです。そう考えてください。

以前には、よく、血筋というものを考えました。姫の体の中には、下総国海上郡垣根村の豪族である父上、根本右兵衛義貞と亡き母上、信夫の血が流れています。根本家は大胆剛毅な気質をもった家系だから、もし姫が男なら、この土地も、荒々しい銚子の海も、おさめることをわたくしに期待されて当然でした。しかし、わたしは、延命費というおんな。わたくしは、根本家に似つかわしい夫を迎え、子どもをさずかり、雄々しく育てたかったのです。

お父さま、お父さまは、姫の結婚の話になると、ひたすら無関心をよそおっていましたね。でも、人一倍気になさっているのが姫には、痛いほどわかっておりました。しかし、結婚だけはどうにもならないのです。誰が悪いのではありません。すべてが血筋のせいなのです。

おぞましい私の血。根本家代々の男に滅ぼされた人々の呪いがこめられたとしか考えられないわたくしの血。その血が咲かせた赤い花。夜の闇の中にひとりたたずんでいると、呪わしい赤い花がトトト、トクリ、トクトク、トクリと湧き上がり、あたしを支配するのです。鼻が闇を埋めつくすのです。

そこにも、あそこにも。おお、いやだ。消えろ、消えろ、消えてなくなれ。

M 4 「赤い花」

わたしの涙を すって咲く
赤い花は わたしのいのち
姫は あなたにかくします
あなたがやさしすぎるから
あなたが そつと唇に
あなたが そつと触れたから
かくします
愛しているからかくします
赤い花の あることを

心のきずのひだに咲く
赤い花は わたしの秘密
わたしは あなたをだまします
愛していると いったから
あなたが そつと耳たぶを
あなたがそつとからだから
だまします 愛しているからだまします
赤い花を 知らないと

延命姫

(山の方角に手を合わせ) 真福寺のお住職様、姫は黄泉の国へまいります。そこで清明さまを探します。今朝、本堂であなたにお会いした時、お住職様は、こう話してくださいましたね。

そもそも人間はひとりひとり違う香りを持つておる。香りとは、人柄であり、かげりであり、年輪である。よつて鼻でかいでもわからぬもの。愚僧などは、まだ修行が足りないから、さもしい香りしか持ちあわせておらぬ。

美しい香りにひかるるは人間の常、ひかれて迷うが人間の業。狂うが人間の性。

ところで姫よ、わしが見るところ、そなたはすばらしい香りを見つけて、てんでんしのぎの大海さながら、心躍つておるじやろう。どうじゃ、どうじゃ。

お住職が、洒脱に話してくださいましたので、姫も心の扉をあげ放つことができず。誰にももらすまいと決めていたひめごとをお話したので。

あれは目もくらむような暑い夏の昼下がりでした。安倍清明さまが、都落ちなさつて、この地へおいでになられた日のことです。姫は、出てはならぬというお父上の厳命で、四方の襖をびしと閉め切り、むつとする部屋の中にたたずんでいました。歌うようにお話しなされる雅な京言葉を、かたく目をつぶつて聞いておりました。気が付いたら全身びっしりと汗をかき、ふすまのわずかな隙間に左の目をあてて、声の主の御姿をかいま見ていました。

わたしはじつと息を止め、犬のような格好をしたまま、しばらく気を失っていたのかもしれない。正気に戻りました。すると全身が打ち震えているのがわかりました。「ああ、聞きしに勝るうつくしい殿方」と気恥ずかしいことをはいてしまいました。

お住職様、香りに魅せられて迷うひとと、香りのとりことなつて狂うひとでは大違いです。お住職様は人間をおわかりになつても、わたしたち女性のことをおわかりにならないのです。女性は香りの魔力にとらわれて、狂つてしまうこともあるのです。

ねえ、乳母、そうなんでしょう。まあ、おかしい。乳母つたら、そこに隠れて様子を探っているのをしているのよ。あなたは、姫が狂つたのを見ぬきましたね。乳母、そうなんでしょう。人一倍心配性で、口うるさく、それでいて悲しい時には姫といっしょに泣いてくれた乳母。今まで、わがままで、お転婆で、いつもそなたを困らせ続けてきた姫だけど、どうか許しておくれ。そなたには心から甘えたかったの。苛立ちをぶつける人は、そちしかいなかったの。

あれは清明さまがお見えになる前の日。つめたく冷やした真桑瓜を三つもつまみ食したとき、そなたは泣いて

しかったはね。「おお、はしたない、はしたない。亡きお母様になんとも報告申し上げましょう。あなたは海上うなかみの

長者さま、長者さまといえばこの上なく富貴なお大名。その方のお姫様ではござりませぬか。」

でも、そなたは恐ろしい方だわ。姫が狂ったのを見透かしたんですもの。一昨日、せみがのどをつぶさんばかりに高く鳴きつづける昼下がり、乳母は、怒ったような顔つきで姫の部屋に入ってきましたね。気味のわるい他人行儀のおもむきで、「今夜、夜ばいをなさいませ。乳母がご案内いたします。」そう言い置いてそなたは出て行った。あとには目がくらみ、息がつまるような春画が袱紗に包まれて、新しい手鏡と一緒に残されていた。

わたしは気がつくのと、利根川のほとりにたたずんでいた。上流で大雨が降ったのだろうか、水かさがまし、赤く濁った水が渦をまいて走り下っていた。水辺の葦は首筋まで濁流につかってもがいている。その様は今の姫の有り様とそっくり。赤い水を見ているうちに心がまりました。

もうどうなってもいい。姫は夜ばいをする覚悟を固めたのです。

二十日の月は、雲に隠れ、乳母が着せてくれた白無垢の花嫁衣装が闇に浮き上がっていた。そなたは乱暴に手を引きながら、「一度だけ、一度だけですぞ」とかすれた声で言いました。わたしは、乳母が何を言っているのか判断できませんでした。利根の濁流にのみこまれ、宿命のるつぼに向かって歩みつづけていました。

「吾あはもよ 女めにしあれば、汝なをおきて 男おはなし、夫つまはなし。」 清明さま、わたしは女です。あなた以外に男はおりません。夫と慕う男はおりません。たとえ、明日になっていかなる破局がおとずれようと。目が見えなくなり、耳が聞こえなくなっても、姫は後悔しません。呼吸がどんだんたかまり、五体すべてがさんざらめいて、乳母にすがりついたら、詩の続きを唱えていました。

「綾垣(あやかき)の ふはやが下に

むしぶすま にこやが下に

たくぶすま さやぐが下に

沫雪(あわゆき)の 若わかやる胸むねを」

すると、どこかで「嫁入りだ。唄え、囃せ、踊りあかせ。」という声が聞こえてきました。

漁師たちの姿がシルエットになって浮かび上がる。彼らは唄う。彼らが、櫂で天を突き、波を叩き、風を切り裂く踊りが荒々しく展開される。劇の進行につれて、波を描いた幕が立ち上がり、漁師たちを隠し始める。篠笛の音が聞こえだすと、漁師の姿は完全に見えなくなる。

延命姫

姫の耳に激しく寄せる波音と、漁師たちの大漁を祝うたごえが荒々しく響いてきました。音で頭がはちきれそうです。それにもかかわらず、姫の目は、暗闇の中にゆらめく小さな行燈の火と、その向こうの清明さまの淡い藤色の夜具を見ていました。うたごえはさらに高くなり、波音も負けじと高まりました。光が交錯し、ぶつかって火花を立てて四散しました。思わず「乳母、助けてください。」とすがりつこうとしました。

乳母は、私の掛を取り去り、着付けの帯の端を掴むと一気に引きました。姫はコマのようにくると回り、清明様の枕元に倒れ掛かりました。乳母は姫の着物を乱暴にはぎ取ってしまいました。そして清明さまの夜具の片側をめくると、姫を力任せに清明さまの上にねじ伏せ、夜具を姫の体の上に掛けると、ふとんの上から二人を抑え込み、念仏を唱えながら「夜ばいです。お許してください。夜ばいです。」と叫びつづけました。

波が砕けました。同間声が、太鼓が、岩が音をたて、吠えました。そして轟音の谷間に、二本の篠笛に似た切々たる姫と僧のささめごとが離れ座敷の庭を駆け、わけしりの夜露の顔を赤く染めました。

照明が溶暗する。笛の音と波の音がかすかに残っている。

上手の奥の方からたくさんのカラスの音が聞こえてくる。何かをギヤアギヤアとはやし立てているようだ。カラスの鳴き声が近づく。延命姫が花嫁衣装で、歌いながら登場する。タヌキが延命姫に緑の傘をさし出している。姫の掛の裾を二匹のね

M 5 「姫の、お嫁入りダイ」

こが介錯しながら鉦を叩いている。その後に、白キツネが神主の装いで、笛を吹きながら続く。次に千歳飴をもったタコと角に瓢箪の徳利を下げたイノシシ、そして嫁入り菓子をまきながらナマズとニワトリがしんがりをつとめる。陽気な行列である。

島田に結った黒髪で

染まった耳をかくして

うつむきかげんの 花嫁の

白いうなじが ふるえている

(およめいりダイ)

高砂や たかさごや

この浦舟に 帆を上げて

とうさん かあさん

お嫁に行きます

(姫の、およめいりダイ)

さようなら

きょうまで お世話になりました

さようなら さようなら

(さらばじゃ さらばじゃ)

長い間の このご恩

けっして 忘れはいたしません

さようなら さようなら

(行列の一行のコーラス)

月もろともに 出で潮の

波の淡路の島影や

遠く鳴尾の沖過ぎて

はや すみのえに 着きにけり

コーンコーン カーカー コケコッコ

はや すみのえに、着きにけり

コーンコーン カーカー コケコッコ カーカー

ヒー ポン ヒー ポンポン ヒヤヒヤヒヤ ポン

雷が響く。あたりが急に暗くなる。

風が砂をまき上げ、松の枝をならす。

延命姫

南無竜神権現、南無竜神様。姫の願いをとげさせ給え。清明さま、高貴なあなたさまが、恥も外聞も捨てて逃げまわるほど、この姫が嫌いなのですか。先ほど、通漣坊の岩鼻で、あなたさまのお召物ときちんと揃えられたはきものを見つけたとき、姫の息はつまり、目の前がまっくらになりました。あなたさまは姫から逃れるために、足がすぐむほど高い断崖から身を躍らせ、平河沖の水底の竜神様のおそばに行ってしまった。ああ、なんということでしょう。姫は清明さまのお命を残酷にもうばってしまったのです。姫は、絶望と良心の呵責にさいなまれ、平河の沖に沈んでいく夕日に向かって手を合わせ、声の限りに泣きつづけました。

しかし、姫は、気づきました。非情な天の声が姫に語りかけたのです。姫は納得しました。あなたは決して自ら命を絶つような、そんな弱い方ではない。どんな困難に遭遇しても、才知の限りをつくして生きのびる方です。姫はもう少して、あなたに欺かれるところでした。清明さま、姫はくやしい、お恨み申しあげます。(さざ波のような鳴咽をもらす)

でも、いまは、あなたを責めはいたしません。わたくしは根本右兵義貞の娘、延命姫です。いかに悲しくとも、いかほどそなたへの想いがつのろうとも、姫は姫らしく、立派な最期をとげてみせます。取り乱しはいたしません。

延命姫は、地に膝をつき、手をあわせる。祈り続ける。

遠雷が聞こえる。平河沖を稲妻が走る。

まったく突然、延命姫は、わめきながら立ち上がる。

延命姫

清明さま、あたしを捨てちゃ、いやだ。捨てないで。戻ってきておくれ。どうして逃げるの。鷹に追われる野鼠のように、つがたの坂から、磯見橋を渡り、帯の坂を上ったかと思えば、ゆつくら坂を下り、また戻ってさぬき台まで一気に登り、そして姿をくらました。

お願いだ。この通り手をあわせて頼むだ。帰ってきておくれ。

延命姫は泣く。磯見川の水面に自分の顔が映る。自分の顔を見た彼女は驚愕の声を立てて後ずさる。同時に耳をつんざく音を立てて、雷が背後の松を引き裂く。

延命姫

あれが、わたしなの。いつの間にか二本の角が生えた醜い女。あれが、わたしなの。ああ、延命姫、そなたは、鬼だ。通漣坊に巣くう鬼女だ。(地を激しく踏み叩き、錫杖で草花を削ぐ。)

(恐怖が静まる)馬鹿、ばか、ばか。延命姫の大ばか。ほほに花のあざが咲いた鬼のようなお前が京から来た男にほれるなんて。都の高貴なお方様に、銚子の在の田舎娘、しかも婚期を逸した潮のにおいが染みついた女が恋をして夜ばいするなんて。ばかめ。夢を見るのもいいかげんしろ。アハハハハハ、アハハハハハ。

泣き笑う声が不安定になる。だんだんうつろに変化する。延命姫の目の焦点が定まらない。客席の近くで、倒れる。後見が大きな蓮の葉を渡す。それを傘にして雨をよける。あめがぴたりと止む。

延命姫

ホホホホ、アハハ、オホホホホホ。いやだ、もう。雨車軸の如く、大地を洗い流したかと思った。もう晴れてしまった。なんと、このカンカン照り。こう暑くては、お腹の赤子が可哀そう。(再び雨が激しく降る。雷がガラガラと天空を駆ける) あれ、また降ってきた。傘が見つからない。早くどこかに隠れないと。(姫は舞台を逃げまどう。と、後見が雷車をすごいスピードで転がして所狭しと駆け回る)

(姫と後見がぶつかりそうになる) ちよつとちよつと、止まりなさいよ。危ないじゃないか。(雷車は姫の制止を無視し、舞台奥の方を駆けまわる) 筑波おろしのバカ雷、トラの革の下帯が丸見えじゃないか。(フト、思い当たる) 待て待て待て、ことよつたら、おまえは雷神。(平河沖にむかつて) やあい、雷神。お前いたずらをしているな。さつきから降ったり晴れたりするんで、変だへんだと思っていたが、みんなお前の悪戯なんだろう。そんな真面目な顔をして、首を横に振ったって、この延命姫様はすっかりお見通しだ。さあ、出て来い。出てきてわびれば許してやる。

やい、雷神、よく見ろ。あたいの大事な花嫁衣装がずぶぬれじゃないか。これを作るのは、大変だったんだぞ。たあととお金がかかったんだぞ。この花嫁衣装を着て、あたいは、陰陽師で天文学博士の安倍清明さまのお嫁さんになる予定だったんだ。(子どものように、純真に、大仰に泣き出す) それを、それを、台無しにしてしまった。花簪はどこかへとんでしまった。角隠しがとれてしまい角が丸出しではないか。あたいは、どうしたらいいんだ。こんな恰好じゃ、お嫁に行けないじゃないか。(ひとしお激しく泣く。急に泣き止む。目玉がいきいきとしている。) あね、新生のおばさんの謡は、そりやうまいんだ。おばさんは十五、六の小娘のような、かわいい声で歌うけど、本当はもうしわくちやのおばあちゃんさ。(延命姫は大きく咳払いして歌いだす。)

M 6 「ふうきとうも」

ふうきと いうも

草の名

みょうが というも

草の名

ふうき 満腹

徳ありて

みょうが あらせ

たまわれや

延命姫は、ひとりで仲人、来賓を演じ、かつ舞を披露する。楽しい、優雅なプレ
ゼンテーションを演じる。

延命姫

(一人の観客に問いかける) もうし、もうし。ちよつとお尋ね申す。あのご高名な安倍清明さまをお見かけになりませんでしたか。それはお美しい、木之花咲耶姫(このはなさくやひめ)が富士の高嶺より種を撒いたので広まったソメイヨシノのような、知的な趣と京風のかげりのある方。いえいえ己の高貴さと、高邁な知性を、派手にキラキラと光らせている方。

なに、あの川、磯見川を越えて向こうへ行かれたと。つかぬことを伺いますが、あの海へ突き出た岩鼻は何と申しますか。なに、この姫が歌って、踊ってくれたなら教えてくださると申しますか。それならば、銚子の豊漁といやさかを願ひ、後世の漁師たちが唄う歌を先取りして披露しよう。では歌いましょう、踊りましょう。

M7 「銚子大漁節」

大きな大漁旗が振りかぶされる。旗は半透明で背後に犬吠の荒波がそそり立っている。二枚の大漁旗が舞台袖から運び出され客席上空を飛翔する。イワシがすのこから雪片のように降り続ける。

音楽は最初は、現在の「銚子大漁節」が勇壮に唄われる。第2コーラスになると、雅楽風に変化する。第3コーラスになると今様になり、「銚子よさこい」に移行する。観客参加があってもよい。

- 一つとせ 一番ずつに積み立てて川口押し込む大矢声 この大漁船
二つとせ 二間の沖から外川まで続いて寄り来る大鯛 この大漁船
三つとせ 皆一同に招をあげ通わせ船の賑やかさ この大漁船
四つとせ 夜昼焚いても焚き余る三杯一丁の大鯛 この大漁船
五つとせ いつ来てみても干鯛場はあき間もすき間も更になし この大漁船
六つとせ 六つから六つまで粕割が大割小割で手に追われ この大漁船
七つとせ 名高き利根川高瀬船粕や油を積み送る この大漁船
八つとせ 八手の沖合若衆が万祝揃えて宮参り この大漁船
九つとせ この浦守る川口の明神ご利益あらわせる この大漁船
十とせ 十を重ねて百となり千を飛びこす万漁年 この大漁船

延命姫

(新妻の姿になっている) ああ、くたびれた。わらわはこれより休息せん。皆のもの、下がってよ

ろしい。よいと申すに。(嬌然と笑って) こちの人、わが君、清明さま。ご学問も結構ではござりますが、時に、わらわに甘い言葉をかけてくださってもよろしいではござりませぬか。あなたさまが「姫ごぜ」と呼びくだされば、わらわが「こちの人」と申し上げます。あーら、恥ずかしい。(大仰に恥ずかしがる)

あらあら、清明坊やは、もうおねんねしたいんでしょう。おめめが、くつつきそう。では、母上が子守唄を唄って進ぜよう。

後見が、赤ちゃんの人形を渡す。最初は、抱いてあやしながら唄う。次に帯で背中に背負い、最後に派手なベビー・バギーに乗せ、美しい日傘をさして散歩しながら唄う。

M8 「もりうた」

舞へ舞へ蝸牛(かたつぶり)
舞はぬものならば
馬の子や牛の子に
蹴(く)ゑさせてん
踏み破(わ)らせてん
真(まこと)に美しく舞うたらば
華の園まで遊ばせん
遊びをせんとや
生まれけむ
戯(たわぶ)れせんとや

生まれけむ
遊ぶ子供の声きけば
わが身さへこそ
ゆるがるれ

家へ行きたい
家へ行きたい
家の孫の 顔見たい
家の孫の 顔見て泣いて
ばばの子守唄
きかせたい

ねんねんよ ねんころり
泣かずに おねんね したならば
ほうびになにをあげましょか
おばばが つくった お馬の人形
一つ ふたつ 三つ みんな あげましょう

あまりに激しく走ったために、ベビー・バギーが転覆する。赤子が激しく泣きだす。現代風のおむつを取り替えるテーブルが出てくる。彼女はおむつを取り替えながら台詞を言う。

延命姫

さあ、いい子。清明坊やはいいい子。そんなにむずかかって、私を困らせないでちょうだい。坊や、む

ずかりたいのは、むしろお母さんの方なのよ。わたしがあなたと過ごしたのはたったの一晚。あとは蛇の生殺し。夜になるとわたしの体は動きだし、蛇のように夜具の上をはい回ります。姫の手が胸に、白いももにからんで、夜が明けるまでふるえ続けます。わたしのどはひとり歌いだします。あるときは魂を凍らせる竜笛の調べのように、あるときは犬若の潮騒のように吠えるがごとく歌います。

ああ、いやだ、いやだ。こんな歌をお教えになった清明さまを憎みます。(突然、声高く笑い出す) 笑い声までふいごのような、ぞっとする低い熱い声になってしまつて。わたしの体の中の炎は、あの浅間の山の炎のように何もかも灰と塵にせんものと煮えたぎり、吹き上がる。

わたしは恨み、呪いの化身です。死の灰の中から、生き返る女なのです。あたしは一体誰なんだろう。わたしは猿、いいえ。わたしは狐、いいえ。わたしは龍、わたしは蛇……。

(フフフと笑う) 犬吠の潮よ、ぐわらぐわらと煮えたぎり、犬吠の台地を潮の湯で洗い流したまえ。この地に生をうけたる犬も、猫も、蜥蜴も、猿も、牛も、馬も、生きとし生きるものすべてを煮えたぎる塩釜の中で、みなのか三七日、二十一日のあいだ煮沸し、けがれた魂を清め給え。もし空に舞い上がりて清めを逃れんとする鳥があらば、ふつつと煮えあがるてんでんしのぎの海よ、血のような紅色の竜神となりて、宙高く飛翔し、鳥たちの行く手を遮り、翼を、眼を、足を灼熱の塩で焼き固め、つくばの尾根にまき散らしたまえ。

怒りから、悲しみに代わる。恋する延命姫になる。清明を探す。

延命姫

清明さま。 姫は、そなたに一目お会いしたい。束の間でいい。御尊顔を拝し、「お慕い申しあげます」といえれば、それで満足です。清明さまのお重荷となるような願いごとは慎みます。悲しいけど、いえ、くやしいけど、「姫を愛してください、姫を妻にしてください」などと申しません。

清明さま、あなたに情けというものがあるならば、一目お会いしたい。姫は夜ばいをしたら自害しなさいという父の教えに背き、あなたを追い回しています。「一度だけの逢瀬ですよ」と何度も繰り返した乳母との約束を破って、

あなたを追って、垣根村から三宅、横根、さらに常世田、八津から親田、なんのその小浜を超えて上永井、ころびつまるびつ円波坂。たとえ猫島生まれでも、京育ちのそなたでは、上手に逃げ隠れできるはずがない。人々は姫を鬼女のようにだと恐れながらもそなたが去った方角を教えてください。さぬき台は行き止まり。フフフフ。

さて、常世田へ引き返さんと、坂を下りつつ、ふと見れば、磯見川の向こうの丘を無様な格好で駆け上がるそなたの姿が目に見え込んできた。その姿を見たとき、姫は都育ちの男の醜さを知りました。ひたすら逃げ続けるあわれな京の男。この男を許してやろうと思いましたが。だって好きだからです。どうしようもなく好きです。姫は、清明さまのおもかげを胸に抱いて、夫婦鼻の水底で、一人さびしく暮らします。二度とあなたに、この不気味な顔をお見せいたしません。

清明さま、どこへいらしたのですか。清明さま。

必死に探し求める。着物がはだける。

遠くで雷が続いて鳴りわたる。空気が堅くなり、草や木がざわざわと震える。鳥が何かに驚いて舞い上がる。延命姫の形相が変わる。面が変わる。衣装が変わる。

延命姫

おのれ清明。どこへ逃げようと、きつとそなたをひっ捕らえ、嫌がるそなたを姫の下帯でつなぎとめ、そなたの心と肉体をいたぶり、いたぶりぬいてやろう。男と女の情愛に、狂うて舞いあそび。ひとえに死なんとぞ叫ぶまで。攻め続けてやるぞ。女の情念の力で、「延命姫、そなたがいとおしい」と、きつと、言わせてみしうぞ。

撞木をふりかざし、三番叟の方固めのように、地を踏む。あたかも隠れている清明に台地の轟を聞かせ、姿を表わせと迫っているようだ。きつと西の方角を見る。舞台上手前に向かって、四股を踏み、すり足でせまる。中空をにらむ。

延命姫

清明、おまえもつまらぬ男だね。こそこそと逃げまわるなんて。夜のとばりは、どんな醜いものをも隠してくれるのさ。女性の肌のぬくもりと香に惑い、延命姫という左のほおにあざのある女性を抱いてしまったのさ。学問のあるお前は、おそらく理性が働き「手を出してはならぬ、誘惑にのつてはならぬ」と自らを戒めたはずだ。そうだろう、陰陽博士。

浅い男だ、かわいい男だ。土と潮の香をたつぷりと吸った田舎娘のはだの匂いに、博士は逆上したのさ。真の人間らしい魂がよみがえったのさ。お前は固く閉じた私の両膝を学者らしからぬ力で押し開き、荒々しい獅子のよしのしかかってきた。そして姫が体の中心をつき抜かれて、思わず悲鳴をあげたとき、おまえも望みが満ち足りた女子のような声を立てたではないか。下に組み敷かれた女が、角こそ持たぬが、鬼のような形相の女であることも知らずに……。うふ、うふ、うふ、うふ、うふふふふふ、はははははははは。

笑いが収まる。肩で激しく息をしている。狐が延命姫の乱れた髪にやさしく櫛を入れる。猫が髪に花簪をつける。カラスが姫の唇に紅を引く。姫の顔が柔和になる。

延命姫

清明さま。姫のお腹には、あなたの命が生きようともがいています。だんだんお腹が大きくなってきたら、どうしよう。きっと大騒ぎになるわ。お父様はぶるぶる震えて、怒りまくるでしょうね。「けしからん、許したい、親不孝ものめ、里子に出せ、近くはだめだぞ、乳母、そちが処理せい、俺は知らぬぞ」って。お父様は本当に横暴で、責任逃れで、どうしようもないほど気の小さい人なんだから。

端午の節句には親類縁者をみんな呼んでこの子を披露しよう。着物を用意しなきゃ。まあまあ、延命姫さま、お待ちなさい。赤ちゃんは男の子か、女の子かわからないでしょう。それじゃ、お祝いの準備もできないでしょう。第一、名前のつけようがございませぬわ。なるほど、なるほど。では、名前は両方用意しておきますわ。男の子だ

つたら、烏丸はるまきがいいわ。それから春材はるまきも悪くないわ。女の子うちこだったら、内子うちこか胤子たねこ、位子ひなだこもいいわ。ねえ、あなた
はどの名前がいいと思います。あなたが好みの名前にしますわ。ねえ、清明さま。

M9 『あなたは「ない」』

波がなく 目が覚める

あなたはこない

松がなく 外へ出てみる

あなたはこない

あたしは鳥

さんざばらくの空をかけた

あたしは魚

平河沖の潮で沐浴したい

波よ 風よ 鳥よ 魚よ

だれか来たら 教えてね

月がさえ 目が覚める

あなたはこない

舟がゆく 外へ出てみる

あなたはこない

あたしはきつね

さんざばらくの野をかけた

あたしは鐘

姫の撞木で 打たれて泣きたい

波よ 風よ 鳥よ 魚よ

だれか来たら 教えてね

(リフレイン)

延命姫

思えば、思えば、口惜しい。清明、よくも姫を嘲笑ったな。

遠雷の音。竜神が空に駆け上がり、のたうつ。その度に雷が響く。眼から照射される稲妻がステージと客席を射る。深い藍色の空、竜神の花緑青に似た緑、輝く眼の金色の光、龍が引き起こす緋色の雲や青紫色の雲、ステージ上になびく木賊

色の草木。ゆたかな色彩がスペースをいろどり、姫の怒りの内的エネルギーが昇華する様を映し出す。空間は乾燥し、無秩序であり、巨大である。

延命姫

笑え。もつと笑うがよい。清明、おまえを焼き殺してやる。犬吠、黒生、平河の海が、ぐわらぐわ

らと煮えたぎり、てんでんしのぎの潮が干上がって、水底が怪奇な岩肌を現そうとも、たとえ、さんざばらくの竹

藪が火の海となって夫婦鼻から竜ヶ崎までの台地が燃え上がり、灼熱の地獄と化し、老若男女、人みな人が、噴火がもたらす火山雷にうたれ、天が放つ炎に肌を焼かれ、目も鼻も唇も焼け落ちて泣き叫び、野ざらしとなるうが、清明、お前を呪いの炎で焼き殺してやる。きっと焼き殺してやる。

遺書の巻紙を自分の体に巻きつけて走る。祈る。

延命姫　ちがう、違う。延命姫はそんな姫ではない。南無竜神権現、南無竜神様。どうか姫の呪いを解いてください。

海にすむ魚たちよ、空を翔る鳥たちよ、野や山を疾駆する生き物たちよ、どうか姫に力を貸しておくれ。姫はお前たちに誓う。一目、清明さまにあうことができれば、姫は竜神のしもべとなって、お前たちを飢えと寒さから必ずや守ってやると。もし、誓いを破るようなことがあるならば、鳥はわたしの両の目をついばむがよい、魚はわたしの胸の肉を噛み千切るがよい、野の生き物たちは姫の五体を引き裂くがよい。どうか、姫が清明さまにあえるよう、力をかしておくれ。

祈る。衣装の一部を引き抜く。体半分が瑠璃紺色に変わっている。

延命姫　おお、おお。南無竜神権現、南無竜神様。姫の体の半分が早くも怨念の化身に変わろうとしています。姫はめぐみの心を持った女でいたのです。どうか変身を止めてください。ああ、指の爪が伸び、かすがいのように曲がろうとしています。心も体も変容してゆくのが見えるのです。狂気の眼ははじけてせり出し、肺臓から熱風が噴出し、咽は打ち震えて笑うがごとく猛り、叫ぼうとしています。

鳥よ、魚よ、けものたちよ、助けてください。このまま時を止めることができれば、姫は愛に生きる女でいられます。たった一度の夏の夜の契りを、天がわれに与えし宿命と受け止め、姫は、石を、たくさんの石を懐にいだいて通漣坊から平河沖の水底へ引かれていきます。愛する女の姿で黄泉の国にたどり着きたいのです。おお、こうしているうちにも、愛が覚めようとしています。愛が覚めたら、姫は鬼になってしまう。

雷が連続して大地をうがつ。音につれて衣装が剥がれおち、紅緋色の衣装に代わる。波幕がひたひたと前舞台をおおいだす。岩礁に見立てた緋色の三段が舞台中央に持ち出される。延命姫は銀色の打杖をかざして岩に登る。

延命姫 おのれ、清明。逃げられるものなら、逃げてみよ。姫はきつとそなたを見つけ出し、捨てられた女の、たぶらかされた女の哀哭を聞かせつつ、心に満ち満ちた憎しみの炎で焼き殺してやる。清明、きつと焼き殺してやる。

(自分を制止して、この一瞬に踏みとどまろうとする) 清明さま、愛の心が壊れてしまったら、姫は蛇になってしまう、鬼になってしまう。鳥よ、魚よ、けものたちよ、約束します……

延命姫 おのれ清明。

延命姫 清明さま。

延命姫 清明。

延命姫 清明さま。

M10 「祈り花」

わたしは 大空を

飛べない とりだけど

目に涙 浮かべても

鳴き声の出ない とりだけど

花びらの舞う夜に

姫は 空を翔け

愛をうたいました

祈り花 祈り花は

天の花 海の花 野の花

祈り花は

二度咲かない

天の花

延命姫

歌いつづけていなければ、愛する心が壊れてしまう。心が壊れてしまつたら、姫は蛇になつてしま

う。いやだ、いやだ。姫は愛する心を持った女の姿で黄泉の国へ旅立ちたい。清明さま、姫は通漣坊から平河沖へ

の潮に乗って、屏風のように突つ立つ三崎の崖を経巡り、名洗、犬若、犬吠、黒生を巡り巡りて、夫婦鼻の潮の臥

所におもむきます。夫婦の鼻と書いて、夫婦と呼ぶところなら、死に行く身の支えとなりましょう。愛する女の

姿で黄泉の国にたどり着きたいのです。それには歌い続けていなければなりません。蛇になりたくない、竜になり

たくない。

わたしは 海原に

住まない 魚だけど

くちびるに 紅ひても

笑い声の出ない うおだけど

潮の泡が舞う夜に

姫は 竜に乗り

愛をうたいました

祈り花 祈り花は

天の花 海の花 野の花

祈り花は

決して実をつけない

天の花

わたしは 何という名の

花かしら

雪割草 おみなえし おとこえし

桔梗 月見草 赤い萩の花

花はみんな散るけれど

祈ります 祈ります 祈ります

散らせて 散らせて 散らせてください

紅^{べにひ}緋いろの 祈り花を

歌いっぱい、通漣坊の断崖から海へ身を躍らせる。

三体の竜神が空に駆け上がる。荒々しかった波が静まり、大きくうねる、おおらかな波音が残っている。

M11 フィナーレ「むかし 女ありけり」

現代のコスチュームに着替えた延命姫が、オーブニングの歌を歌う。
銚子の港、市場、屏風ヶ浦、河口神社、利根川、醤油工場、銚子大橋など
の映像が投影される。

いまはむかしの物語

坂東太郎のながれ着く

うおと潮の香にみちる

銚子は国のとつぱずれ

夫婦(めど)鼻(ばな) 黒生(くろばえ) 霧ヶ浜

犬吠 犬(いぬ)若(わか) 名洗(なあらい)に

つづく地なる 屏風ヶ浦

じっとり暑い夏の日

京のおとこに恋をした

延命(えんめい)姫(ひめ)は 蛇(へび)になった

いまはむかしの物語

延命姫は 二十六

顔にあざの花模様

銚子は国のとつぱずれ

夫婦(めど)鼻(ばな) 黒生(くろばえ) 霧ヶ浜

犬吠 犬(いぬ)若(わか) 名洗(なあらい)に

つづく地なる 屏風ヶ浦

まっくら闇の夏の夜に

乳母の手引きで夜ばいした
延命姫は 蛇になった

銚子の海は てんでん しのぎ
姫の恋も てんでん しのぎ
九十九里の潮騒が

絶えぬかぎりに語りつぐ

波と風の鎮魂歌

ああ 銚子娘道成寺

幕が下りる。

あとがき

田中幸次郎著『銚子娘道成寺』の巻末にある附録を紹介する。必ずしも歴史や地理にもとづいて精査された論述ではなからう。いわば田中氏一人が訪ね歩いて、聞き取った考現学的資料と考えるのがよい。フィールド・リサーチした結果を整理したレポートでもある。だれに聞くか、事実ならどこまで裏がとったかで、価値が違ってくる。また筆者が思い違いしていたことや間違っって書き留めることもある。

筆者が、ここに引用した理由は、銚子という土地のロマンと風景に魅せられたからであり、この土地には平安時代の史実も伝説も見事におさまる。また数百年にわたる、海を介した産業・漁業・文化がいきいきと残っている。不思議な町だ。

今日出版されている案内書やウェブ上の記事や写真は今日の情報である。田中氏の著作は数十年以前に聴取した逸話や風景を資料として構築されている。田中氏の想像力はたくましく、ロマンティックであり、若々しい。リサーチのモチベーションとなっていたことは間違いない。

延命姫の物語を世に出すために、六代目中村歌右衛門さんや女形の役者と接触を試みたと聞いた。もし小川芋銭が銚子娘道成寺のイラストを描いてくれたら、きっと大きな進展があったかもしれない。ぜひ、芋銭の「海島秋来」（昭和七年）をご覧ください。（小林志郎）

六 附録

(一三) 延命姫死体の漂流と対岸地の歴史

延命姫と亡骸の漂流は異常であって、誰にでも本当とは考えられない。

上永井平河沖から、銚子の川口でんしのぎまで、海上の距離として四里（一六キロメートル）余りもある。それも、まっすぐではないのだ。直角に曲がるところが二度もあるのだ。すなわち別図のように銚子半島を一周するのだ。

延命姫の亡骸は、現行の銚子市と飯岡町の堺となる海上郡上永井の磯見川、その川がそそぐ平河沖から流れだし、銚子半島の南と東の海に面する二辺の全部一六キロ（四里）を漂流したことになる。それは、三方を水に囲まれた銚子市の半分であり、残りは香取郡に隣接する宮原町までの利根川の流域、一七キロ（四里九丁）である。さて延命姫の亡骸が漂流した海域の対岸地には、いろいろの名所旧跡などがあり、またおもしろい故事も伝わっている。それらを、亡骸の漂流につれて、順次に拾っていく。

屏風岩（三崎崖） 屏風浦

平河沖の東に連なる海域が屏風浦である。こちらの飯岡鼻（佐貫台の突先、向こうが飯岡港である）から、銚子市の名洗海岸、犬若海水浴場の近くまで、凡そ八キロ（二里）にもわたる弓なりに湾曲した崖である。俗に三崎崖という。この上から波打ち際まで十数丈（一丈は約三メートル）もあるうか。切り立ったような断崖で、丁度屏風を立て掛けたようである。

その断崖の肌は、茶褐色をしていて、前面の屏風浦の紺碧にいかにも鮮やかな調和美を表わしている。通漣坊側から見ても、犬若側からも、いずれからも油絵のような異国的な感覚を与えてくれる。

名洗港

昭和二六年に港湾法に基づいて避難港に指定された。防波堤延長五七〇メートル、総工費七億七千万、昭和四〇年完成見込みであったが、未だ工事中である。これは随分古い話である。はっきりした年代は不明である。海岸の西南に字大谷というところがあり、そこへ紀州（和歌山県）加多浦（淡路島洲本の対岸）の漁民が漂流して穴居生活をした。これが、紀州人の銚子移住のトップだそう。

後に、この紀州の人たちは名洗の大谷から北方千米小川戸の栗島へ移住するのであるが、小川戸開拓者たちで、俗にいう栗島十六軒であるという。さて、名洗海岸の近くに砲台の遺跡がある。ここから採れる牡蠣の味は格別で、名洗牡蠣として知られている。

紀州の加多浦とは、和歌山県和歌山市加太のことと思われる。加太について、淡路宏氏が和歌山市のホームページに寄稿した「加太の歴史について」（奈良・平安時代の加太郷）の中で、『続日本記（797年）正月十月条には、「始

めて紀伊国に賀陀の馬屋を置く」とある。駅制・伝馬は奈良時代・律令制の交通制度で、諸道三十里(16km)毎に馬屋を置き、駅馬を備え、駅鈴を持った急用の官吏の往来に供した。(中略)加太は、賀太、可太、賀多、蚊田、賀陀とも書く。』と述べている。その他の資料を参照したが、田中幸次郎氏の加多浦という表記を見つけることはできなかった。(小林志郎)

犬若

海水浴場として知られている。潮流の関係か、銚子市は海岸線が長いのに泳ぐことのできる海岸は、この犬若か海鹿島ぐらいなもの。ここは特に遠浅のため泳ぎの出来ないものや初心者には最適である。しかし海水浴に適しているのは西側で、屏風岩の見える犬若の右側である。しかし、仙ヶ岩(千騎ヶ岩)を前に見る南側海岸は危険だという。

犬岩、千騎ヶ岩など、上永井佐貫城主片岡八郎常春の弟弘常の君主源九郎義経の古蹟だと伝わっているが、さだかではない。

外川

古くは、高見ヶ浦といった。二十一年目毎の大祭典、応神様即ち東大神のお浜下りは有名である。

外川港の基礎を作った功労者は紀州有田郡広村の大納屋崎山治郎右衛門氏である。治郎右衛門は三〇八年前、一一二代後西天皇の万治元年、西暦一六五八年、外川浦に波止場を築造し、市街建設にとりかかった。そして六年間の努力が実を結んで完成した。時は一一三代靈元天皇の寛文四年、西暦一六六四年である。

このため紀州人の大移住となって、外川港は全戸未曾有の盛況をきたした。また商工業者の移住も激増した。「外川千軒 大繁盛」と、一般に騒がれたのはこの頃のことであったという。そして、その繁昌は半世紀に及んだらしい。一一五代中御門天皇の享保元年、西暦一七一六年、丁度今から二五〇年前になるが、その年の銚子の八手網はちだあみの数を、銚子の漁業研究家・故福与多喜知氏の『網繰漁業記』四頁にはこう書いてある。

外川浦

四五張

飯具根浦(川口町)

四二張

荒野浦	一八張
松本浦	七張
黒生浦	三張
合計	一一五張

その年、帝都では吉宗が八代將軍となつて、間部訴房、新井白石を廢し、巡檢使を諸國に派遣し、民政を視察する、大奥の贅沢をいましめるなど、上巖下温、吉宗一流の緊縮政治を始めた年であつた。

外川港は、その年を契機として、漁獲は次第に減少衰退の一途を辿り出した。(中略)

そして、それから半世紀が過ぎた。一一八代後桜町天皇の明和五年、西暦一七六八年、今から一九八年前、外川浦の網株がたった二軒、商家が五、六店を残すまでの衰微状態になつたと『鰯漁業記』の四頁に書いてある。そして、流石の達見者崎山治郎衛門も外川を引き払つて故郷の紀州広村へ歸つてしまうのである。

漁網の中央部が緻密で、外側が広めの風呂敷状の浮敷網(うきしきあみ)。へ八田網とも書く。棒受網の規模を拡大した多艘張網で、網の大きさは中位のもので30ほどある。この網は水深約400の岩浜で、駆具、撒餌(まきえ)、篝火(かがりび)などを使って魚群を網上に誘い、漁獲する。漁獲物はイワシを主に、アジ、ムロ、サバである。漁法は網が潮流を受けて、海中に帆を張つた形になるように敷き、網上に魚群が来ると、網の曳綱を引いて狭め、タモ網ですくつて漁獲する。(世界大百科事典 第2版 株式会社日立ソリューションズ)

犬吠崎

別の名を「石切の鼻」といった。音痴を「犬吠崎」としやれる。「銚子っ端れ」だからだ。(中略) 犬吠崎、この名も義経由縁である。彼が立ち去るに際し、置き去りにした愛犬が別れを惜しんで吠え続けた、という。これも伝説である。

ほととぎす 銚子は 國のつばつれ 江戸小網町 古帳庵

犬吠の 今宵の朧 待つとせん

高浜 虚子

君ヶ浜

犬吠崎と海鹿島、約一キロ半の海浜をいう。

霧が浜とも云われる。去来の波濤の飛沫が常に霧を散らすからという。海浜一帯は松林を背にして相連なり、いわゆる白浜青松の景観美しく、関東舞子の名もある位である。しかし、この長い距離を持つ海浜が残念にも海水浴に適さないのである。潮流の押し寄せ、引き戻すのが猛烈であるからだという。

海鹿島

この海岸いつたいを伊勢路ヶ浦といわれた。元禄年間、ヒゲタ醬油主人田中玄蕃氏が、海岸西方の丘の上に伊勢両宮神霊を祀ったことによる。その後、海中の島に遠く北海より、海鹿が来たり、群れ遊ぶのが見うけられるようになり、いつのまにか海鹿島の名と変わった。しかし海鹿は明治三十年以後はその姿が見えなくなったという。

ここへは昔から文人墨客が多く訪れたようだ。一二代霊元天皇の元禄年間には松尾芭蕉がこの海岸を訪れている。(中略)

次に明治に入ってから、銚子市が故郷の文壇の雄、国木田独歩は

なつかしき わが故郷は何処ぞや 彼処にわれは 山林の児なりき

とうたった。

続いて、画家の小川芋銭は

大海を 飛びいづる如と 初日の出 芋銭子

と詠じた。御来迎の勇壮広大に強く感動させられた姿がよく解る。(後略)

さんざばらく

何だ、梵語か？ ときかれる。が、黒生と夫婦鼻の間、約千メートル（九町）の海岸を云うのである。ここは高さ十五メートル位の断崖で、前の海が大漁節二番で知られる「ふたばヶ沖」。実際は、ふたまヶ沖、である。

この海岸道の両側には丈の低い竹藪が続いて、海風が吹くとザワザワと音立てる。その音をとって、土地の人はそこを「さんざばらく」という地名にしたのである。いかにも、田舎人らしい、その場所と音に対するムードを、そのものズバリと表現した地名だと、いつも感心する。

めどはな
夫婦鼻

銚子市の東北の端れである。長崎鼻の対照地（ママ）で、南の口に対して、この鼻は北の口である。

古くは、目途鼻海上から銚子の川口へ入るメドであったことから、この名の方がふさわしいような気がする。いや、下に洞窟があるから目と鼻だという。これもまた正しいような気がする。

「銚子娘道成寺」のご意見をお聞かせください。
小林志郎

メール・アドレス: DQJ10334@nifty.com